様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１３２１８

研究課題名（和文）接頭辞付加の形態論上の位置づけに関する通時的・共時的研究

研究課題名（英文）A Diachronic and Synchronic Study of the Status of Prefixation in Morphology

研究代表者
納谷　亮平（NAYA, Ryohei）

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：００８３７５３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、英語の接頭辞付加に注目し、その形態論上の位置づけを、通時的・共時的観点から明らかにすることである。接頭辞付加は、通常、接尾辞付加と類を成し、派生形態論の一部として位置づけられている。しかし本研究では、「接頭辞付加は、複合または屈折のどちらかの操作と類を成す」という仮説を提唱し、その妥当性を通時的・共時的データに基づいて検証する。この仮説が正しければ、接頭辞付加は派生形態論においては役割を持たないという帰結が得られる。本研究は、英語の接頭辞およびその付加の本質的性質を明らかにするとともに、英語形態論の内部構成（派生・複合・屈折の境界）に関する理解を一層深めるものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の主な対象は接頭辞を伴う名詞由来形容詞をはじめとした名詞修飾要素である。英語形態論研究において、派生形容詞およびその形成過程に関する研究は、他の複雑語の場合と比べて、遅れていることが指摘されてきたが、本研究は、名詞修飾要素を重要な分析対象とすることで、未開拓の部分が多い派生形容詞自体の性質の解明に貢献することができる。
また、本研究の仮説である「接頭辞付加は複合と屈折のいずれかの操作と類を成す」という観点から接頭辞付加を再整理する試みは少ないため、本研究は接頭辞付加の新たな姿を明らかにできる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to examine the morphological status of English prefixation from both diachronic and synchronic perspectives. Prefixation, along with suffixation, is generally considered part of derivational morphology. However, this study proposes the hypothesis that “prefixation is grouped together with either compounding or inflectional processes,” and it examines the validity of this hypothesis based on diachronic and synchronic data. If this hypothesis is correct, then prefixation does not play a role in derivational morphology. This study contributes to elucidating the intrinsic nature of prefixes and prefixation in English, thereby deepening our understanding of the internal structure of English morphology, particularly the boundaries between derivation, compounding, and inflection.

研究分野：英語学、形態論

キーワード：関係形容詞　形容詞化　名詞修飾　特質構造（Qualia Structure）　等位複合語　主要部性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

主要な形態操作として派生、複合、屈折が挙げられる。接頭辞を付加する操作は、接尾辞付加とともに、派生形態論として位置づけられるのが一般的であるが、先行研究の観察や知見をまとめると、複合と屈折という 2 種類の操作に分かれる可能性が見えてくる。そこで、本研究課題は「接頭辞付加は、複合または屈折のどちらかの操作と類を成す」という仮説を立て、その妥当性を検証する。

接頭辞付加を複合とみなす研究として長野 (2013)が挙げられる。長野 (2013)は、多くの英語の接頭辞が、接尾辞（機能語）ではなく語彙素（内容語）と類を成すことを指摘している。そうであれば、接頭辞の付加は、語彙素を結合させる操作であり、これは複合ということになる。一方で、Emonds (2005) では、Emonds (2000)で提唱された理論的枠組み (Bifurcated Lexical Model) に基づき、接頭辞は、時制形態素といった屈折接尾辞と同様の操作によって音韻具現されるという分析の方向性が提示されている。これらの研究に基いて上記の仮説の方向性を打ち出したのが Isono et al. (2018) である。この研究が注目したのは、長野 (2013) が語彙的な接頭辞（豊かな意味を持つ、内容語の性質を持った接頭辞）を扱う一方、Emonds (2005) が機能的な接頭辞（否定やアスペクトに関わるような、機能語の性質を持った接頭辞）を中心に論じている点である。このことから、語彙的接頭辞の付加は複合として、機能的接頭辞の付加は屈折型の操作として分析できると主張した。本研究課題は、この方向性をさらに発展させるものである。

２．研究の目的

本研究は、上述の仮説を検証することを通して接頭辞付加の形態論上の位置づけを明らかにする。この仮説が正しければ、接頭辞付加は派生においては役割を持たないことになる。ここで問題になるのは、語の品詞を変える機能を持つようにみえる接頭辞の存在である。例えば、*anti-* や *pro-*といった接頭辞を付加して形成される語は、名詞を修飾することができ、この点で形容詞であるようにみえる（例：*anti-war movement*, *pro-popery Ministry*）。もしこれらの接頭辞に形容詞化の機能があるとすれば、英語が一般的に従う「右側主要部の規則」 (Williams (1981), Nagano (2011)) の反例となるとともに、上記仮説にとっても問題となる。そのため、これらの接頭辞をどのように扱うのかという点に答えることが重要となる。

３．研究の方法

先行研究から得られる知見を基に、*Oxford English Dictionary Online* (*OED*) などからデータを収集し、その分析を行う。*OED* は、各語（および、各定義での用例）の初出年や語源に関する情報が掲載されているため、通時的観点からの調査を行うことができる。また、共時的な観点からの調査として、英語母語話者による文法性判断テストを行う。これらを通じて、上記仮説の検証を行っていく。

４．研究成果

本研究課題の中心的な問いは 2 節で挙げたものであったが、これに関連して大きく 2 つの付随した論点に取り組むこととなった。まず、複合・派生・屈折の区別においてはその操作に参入する要素の性質（内容語であるか機能語であるか、など）が重要になってくるが、この点から名詞化接尾辞と、名詞が「透明な主要部」（後述）として機能している複合語の分析を行った。また、*anti-*や *pro-*といった接頭辞が形容詞化を担わないのであれば、結果としてできる修飾語は名詞のまま名詞を修飾することになる。そこで、「名詞による名詞の修飾」に注目する必要が生じ、この観点から関係形容詞（例：*industrial* < *industry* + *-al*）および同格複合語（例：*singer-songwriter*）を含めて研究を展開することになった。これらの点を含めて、本研究課題の主要な成果は、次の 3 点にまとめることができる。

(1) 複雑語を形成する要素の性質と主要部性

名詞化接尾辞の研究として、Naya (2018) を発展させる形で、現代英語における*-ment* 付加に焦点をあてた。*OED* の調査により、1900 年以降に形成された*-ment* 名詞の中には、名詞（もしくは）形容詞に*-ment* が付加している例や、転換動詞に付加している例がみられることが分かった。これらは、*-ment* を派生接辞（機能語）の性質のみを持つ要素と考えると問題となってくる。まず、機能語は多くの場合、それが付加する統語範疇は一定であり、動詞を選択して名詞化する要素である*-ment* が名詞または形容詞に付加するのは例外的な現象にみえる。また、「転換により品詞変換を経た語には派生接辞は付加しない」という一般化が知られているが (Myers (1984))、この点で現代英語の上記の例は問題となる。これらの一見例外的な語について、Emonds (2000)の枠組みにおいては*-ment* を内容語としてみることができ、これらの語を複合語として分析できる

ことを示した。これは、多くの名詞は相手の品詞に依らず複合語を形成することができ、また、上記の一般化は「派生接辞」に対するものであり、内容語としての名詞がこれに従わないとしても、問題にはならないからである。これらの成果は形態論専門の国際学会で発表することができ、発表で得たフィードバックを基に発展させて論文化し、国際ジャーナルに投稿することができた。

以上の例は、本来は機能語とされる要素が内容語として振る舞う例であるが、それとは逆の例、つまり、本来は内容語であるが機能語として振る舞うことで生じる現象として、複合語における「透明な主要部 (transparent head)」(Toman (1986)) を挙げることができる。複合語は通常、主要部が補部に選択する要素を決めるが、一部の複合語では、非主要部が主要部を超えて補部を選択している。例えば(i) *the healing-time of all ills* (Boase-Beier (1987)) および (ii) *a guidebook to modern linguistics* (竝木 (1985)) において、前置詞句を選択しているのは下線部の複合語のうち非主要部（つまり、*heal(ing)*と *guide*）である。これらの例の主要部は言わば無視されており、補部選択という点においては「透明」になっている。Naya (2018) においては、(i)に注目し、このような複合語の透明な主要部となれるのは、名詞の中でも機能語のように意味の薄いもの（例：*time, period, process, place*）に限定されると主張した。一方で(ii)のタイプの主要部は *guidebook, input structure, invitation card* などに見られるように、意味の「濃い」名詞である。そのため、これらの名詞が透明になっているのは、その本来的な性質によるのではなく、非主要部との意味上の関係によるものであると主張した。具体的には、この種の複合語の主要部と左側要素は、上位語・下位語の関係もしくは部分・全体の関係にある。*guidebook* であれば、「*guide* は *book* の一種である」という関係が成り立つのである。この成果は国内ジャーナルの *English Linguistics* において論文として発表することができた。

(2) 名詞由来修飾語

*anti-*や *pro-*が付加した語の品詞を考える上で重要なことは、これらが「形容詞」とされる場合、その多くが名詞を前位修飾しているという点である。名詞を前位修飾する要素は必ずしも形容詞である必要は無いため（例：*industry output*）、名詞前位修飾の例は *anti-*や *pro-*に形容詞化能力を認めることの強い証拠とはならない (Naya (2017))。一方で、*anti-*X や *pro-*X といった語が述語位置に現れる例は依然として問題となる。そこで、Ishida (2020) による接頭辞付き関係形容詞（名詞由来形容詞の一種；*monochromatic, binational, multiracial* など）の分析を応用することで、この問題の解決を試みた。関係形容詞は限定用法のみを持ち、修飾対象の名詞の分類を行う形容詞として知られるが、接頭辞付きの関係形容詞は、述語位置に現れることができる。Ishida (2020) の分析によれば、このような関係形容詞は名詞修飾用法を維持しているものの、接頭辞が対比を喚起するために、修飾対象の名詞を削除することができ、結果として当該関係形容詞があたかも単独で述語位置に現れているように見えるのである。これと同様のことが、*anti-*や *pro-*にもあてはまると考えることができる。つまり、これらの接頭辞も「反対」「賛成」という対比に関わるため、その修飾対象を削除することができるのである。

このような分析を推し進める上では、次の根本的な問いが重要となる。すなわち、本来的には限定用法で用いられる関係形容詞が、対比の環境に置かれる場合には述語位置に生起できるのはなぜかという問いである。本研究課題では、まず、関係形容詞の分類機能は、基体名詞が修飾対象の名詞の特定の特質役割（Qualia Role）と結びつくことによって生じると主張し、その上で、この結びつきが対比によって明確になるという点から上述の問いに答えた。この成果を日本英語学会国際春季フォーラム 2021 において発表し、優秀発表賞（佳作）を受賞するに至った。

(3) 名詞による名詞の修飾

上記の議論は、さらに、「名詞による名詞の修飾」を含めて発展させることができた。そのきっかけとなったのは、「名詞＋名詞」と「関係形容詞＋名詞」の比較である (例：*industry output* vs. *industrial output*)。先行研究においては、両者の間には意味上の違いは無いされてきた。一方、本研究課題において、まず、両表現がそれぞれ表すことのできる意味範囲には違いがあり、「名詞＋名詞」の方がより広い関係性を表せることを明らかにした。次に、このような違いが生じる理由について、分類に関わる機能範疇の有無という点から論じた。関係形容詞は、分類に関わる機能範疇によって修飾対象の名詞と関係付けられる一方 (Shimada and Nagano (2018))、名詞が名詞を修飾する場合にはそのような機能範疇による介在が無いため、より自由度が高いのだと考えられる。

また、同格複合語（例：*singer-songwriter*）の構成素間の関係に関して、形態論と語用論の関係という観点を含めて考察を深めることができた。同格複合語は一般に等位複合語に分類されるものの、情報構造といった談話上の要因が、(i) より好まれる構成素の順序、(ii) 構成素間の修飾関係および複合語全体の解釈、(iii) 強勢位置といった点に影響を与えることを、インフォーマント調査から得られたデータに基づいて論じた。

＜引用文献＞

Boase-Beier, Jean (1987) *Poetic Compounds: The Principles of Poetic Language in Modern English Poetry*, Max Niemeryer, Tübingen.

Emonds, Joseph (2000) *Lexicon and Grammar: The English Syntacticon*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Emonds, Joseph (2005) "The Computational Lexicon," *English Linguistics* 22, 232–266.

Ishida, Takashi (2020) "Prefixed Relational Adjectives in English," *JELS* 37, 38–44.

Isono, Haruki, Hiroko Wakamatsu, and Ryohei Naya (2018) "Resolving Prefixation into Compounding and Inflection," *JELS* 35, 238–244.

Myers, Scott (1984) "Zero-derivation and Inflection," *MIT Working Papers in Linguistics 7: Papers from the January 1984 MIT Workshop in Morphology*, ed. by Margaret Speas and Richard Sproat, 53–69, Department of Linguistics and Philosophy, MIT.

Nagano, Akiko (2011) "The Right-headedness of Morphology and the Status and Development of Category-Determining Prefixes in English," *English Language and Linguistics* 15, 61–83.

長野明子 (2013)**「複合と派生の境界と英語の接頭辞」『生成言語研究の現在』池内正幸・郷路拓也** (**編著**), 145–161, **ひつじ書房**, **東京**.

竝木崇康 (1985) **『語形成』大修館書店**, **東京**.

Naya, Ryohei (2017) "The Apparent Category-Changing Function of Prefixes in English: A Preliminary Study of 'Adjectivalizing' prefixes," *Data Science in Collaboration* 1, 125–134.

Naya, Ryohei (2018) *A Study on Semi-lexical Categories in Word-Formation in English and Japanese*, Ph.D. dissertation, University of Tsukuba.

Shimada, Masaharu and Akiko Nagano (2018) "Relational Adjectives Used Predicatively (But Not Qualitatively): A Comparative-Structural Approach," *Lexique* 23, 62–89.

Toman, Jindrich (1986) "Transparent Head, Inheritance and the Normal Form," *Acta Linguistica Academiae Scientiarum Hungaricae* 36, 211–219.

Williams, Edwin (1981) "On the Notions 'Lexically Related' and 'Head of Word'," *Linguistic Inquiry* 12, 245–274.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 Ryohei Naya, Takashi Ishida	４．巻 42
２．論文標題 The (Un)availability of Pragmatic Information in the Domains of Words, Phrases, and Sentences: Consistent Contrasts between English and Japanese	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Tsukuba English Studies	６．最初と最後の頁 161-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Takashi Ishida, Ryohei Naya	４．巻 64
２．論文標題 Why Are English Appositional Compounds Stressed on the Right-Hand Constituents? An Information Structure Approach	５．発行年 2024年
３．雑誌名 広島修大論集	６．最初と最後の頁 55-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Takashi Ishida and Ryohei Naya	４．巻 41
２．論文標題 Presidential Company vs. President Company: Very Subtle but Crucial Semantic Differences Between RA-N and N-N	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Tsukuba English Studies	６．最初と最後の頁 19-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ryohei Naya	４．巻 39
２．論文標題 Review: The Semantics of Case, by Olga Kagan, Cambridge University Press, 2020	５．発行年 2023年
３．雑誌名 English Linguistics	６．最初と最後の頁 281-292
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Takashi Ishida and Ryohei Naya	4．巻 39
2．論文標題 Why Does Contrast Allow Relational Adjectives to Be Used Predicatively? A Qualia Structure-based Account	5．発行年 2022年
3．雑誌名 JELS	6．最初と最後の頁 171-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 納谷亮平・石田崇	4．巻 -
2．論文標題 使用場面から見えてくる同格複合語の非等位性	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本英文学会東北支部 第76回（2021年度秋季大会）Proceedings	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ryohei Naya and Takashi Ishida	4．巻 4
2．論文標題 Double Endocentricity and Constituent Ordering of English Copulative Compounds	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Data Science in Collaboration	6．最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15068/0002002522	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Takashi Ishida, Yuri Togano, and Ryohei Naya	4．巻 38
2．論文標題 Two Types of Germanic Suffixes Forming Relational Adjectives in English	5．発行年 2021年
3．雑誌名 JELS	6．最初と最後の頁 170-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Takashi Ishida and Ryohei Naya	4．巻 20
2．論文標題 Qualitative Adjectives as Reference Modifiers in Japanese	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本認知言語学会論文集	6．最初と最後の頁 269-281
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ryohei Naya	4．巻 36
2．論文標題 Syntactic and Semantic Factors behind Head Transparency in English Compounds	5．発行年 2020年
3．雑誌名 English Linguistics	6．最初と最後の頁 180-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.9793/elsj.36.2_180	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ryohei Naya and Takashi Ishida	4．巻 3
2．論文標題 The Categorial Status of Prefixed Words: (Re-)Examining the "Derivational" Function of anti- and pro-	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Data Science in Collaboration	6．最初と最後の頁 42-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15068/0002002420	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　7件）

1．発表者名 Takashi Ishida and Ryohei Naya
2．発表標題 Nominalising Suffixed Adjectives via Lexicalisation and Clipping
3．学会等名 ELSJ 17th International Spring Forum 2024（国際学会）
4．発表年 2024年

１．発表者名 Ryohei Naya and Takashi Ishida
２．発表標題 On Imaginary English Dvandvas in Relational Adjectives
３．学会等名 International Symposium of Morphology 2023（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 納谷亮平・石田崇
２．発表標題 使用場面から見えてくる同格複合語の非等位性
３．学会等名 日本英文学会東北支部第76回大会 SYMPOSIA（英語学部門）「談話依存の形態論・語形成―談話情報はどのように語彙レベルの現象に関与するのか？」
４．発表年 2021年

１．発表者名 Takashi Ishida and Ryohei Naya
２．発表標題 Why Does Contrast Allow Relational Adjectives to Be Used Predicatively? A Qualia Structure-based Account
３．学会等名 ELSJ 14th International Spring Forum 2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Ryohei Naya and Takashi Ishida
２．発表標題 Double Endocentricity and Constituent Ordering of English Copulative Compounds
３．学会等名 Data Science and Collaboration 2020（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Takashi Ishida, Yuri Togano, and Ryohei Naya
２．発表標題 Two Types of Germanic Suffixes Forming Relational Adjectives in English
３．学会等名 ELSJ 13th International Spring Forum 2020（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Ryohei Naya
２．発表標題 The Status of Affixes and the New Words by -ment in Present-Day English
３．学会等名 International Symposium of Morphology 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小田切菜々・戸鹿野友梨・石田崇・納谷 亮平
２．発表標題 日英語における関係形容詞の形成手段と述語位置への生起可能性
３．学会等名 Morphology & Lexicon Forum 2019
４．発表年 2019年

１．発表者名 Takashi Ishida and Ryohei Naya
２．発表標題 Qualitative Adjectives as Reference Modifiers in Japanese
３．学会等名 日本認知言語学会第20回全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Ryohei Naya and Takashi Ishida
２．発表標題 The Categorial Status of Prefixed Words: (Re-)examining the "Derivational" Function of anti- and pro-
３．学会等名 Data Science in Collaboration 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関